語り物の宇宙

川村二郎

講談社

語り物の宇宙

川村二郎

講談社

語り物の宇宙

一九八一年七月三日　第一刷発行

著者——川村二郎

© Kawamura Jiro 1981 Printed in Japan

発行者——三木　章

発行所——株式会社講談社

東京都文京区音羽二丁目三十二　郵便番号一二三　電話東京〇三—九四五—一二一　振替東京八—五九三〇

印刷所——信毎書籍印刷株式会社　製本所——藤沢製本株式会社

定価——一三〇〇円

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部宛にお送りください。
送料小社負担にてお取替えいたします。

0095-183682-2253（0）　（文1）

目次

甲賀三郎　5
小栗判官　65
しんとく丸　127
語り物の文体　207
あとがき　227

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbo

語り物の宇宙

装幀・平野甲賀

甲賀三郎

(一)

小さな工場の寮か田舎の学校の宿泊所のような旅館を、朝、出かけぎわに、大岡寺にはどう行ったらいいでしょうと、若いおかみさんに訊ねてみる。おかみさんは、さあ、と首を傾げる。話を聞きつけた亭主が、やはり若くても男だけあって、大岡寺なら、この前の国道をまっすぐ行けば右手にあります、と教えてくれる。

前の晩は、薄暗くなってからこの水口の街に着いた。かつての東海道の宿場町にしては、近江鉄道の駅も駅前の通りもすこぶるうらぶれた風情で、泊る所があるだろうかと、少し心もとなくなったほどだった。しかしとにかく、駅で教えて貰った宿に落ち着き、幾らかの酒を飲み、ほっとして窓の外を見ると、折しも仲秋の名月の宵、颱風が近づいているせいで空の雲行は速く、月はちぎれてはためくおびただしい弔旗の波間に、浮き沈みして漂う鏡のように見える。いかにも心細く凄じげなこの光景は、しかし、真黒な雲が月をかすめる時にぱっと鮮かな銀色に染まる、その黒と銀との色調のめまぐるしい交替によって、奇妙に心をそそる華やいだ眺めとなってもい

た。酔った頭で、何ということなしに、これが甲賀だな、甲賀の風景だな、と自分にいい聞かせるようにくり返していた。

翌朝大岡寺に出かけて見たのは、だが、華やぎというにはあまりにも凄じく荒涼とした光景だった。旅館の亭主に教えられて歩いて行く道の先には、かなり遠くから、三角帽子を被ったような妙な建物が見え、まさかあれではないだろうと思いながら近づくと、やはりそれが、めざす大岡寺観音堂なのだった。三角帽子は褐色のトタンで、それが本来の瓦屋根の上に被せられ、鎖でとめてある。明らかに修復のための一時的な覆いではなく、老朽した屋根をその形で心細く守っているにすぎない。さして古い時代の建築でもないと推測されるのに、老残と頽敗の影は、手入れの行き届かぬ境内をも含めて濃く滲みこみすぎており、しかも、無住の寺ならばまだしも、堂の内部は一応仏殿の体裁を保ち、日々の勤行のために調えられているだけ、一層生々しい腐臭を放つように思われた。腐りかけ、死にかけながら、まだ生きている。それは朽ち果ててしまったものより、はるかに無残な、正視にしのびない眺めだといってよかった。

寺の背後は国道を隔てて、岡山という小さな丘になっている。戦国時代にはここに城が築かれていたが、さらにその昔、中世には、大岡寺はこの山上に多くの坊舎を擁する大寺院だったのだという。その追憶すら、現在の衰落を一入痛ましく思わせる機縁以外のものではない。寺域から山門をくぐって石段を下り、旧東海道の道筋に出る参道の脇に、一本の石柱が立っている。正面

に「岡観音」と刻まれたその標石の一方の側面には、「鴨長明発心所」とあり、そしてもう一方の側面には、「甲賀三郎兼家旧跡」と、達筆の文字が刻みこまれている。文字を見にわざわざここまで出かけてきたわけではなかったのに、それしか頼るものがないような気分で、しばらくその標石を見つめていた。

甲賀三郎の物語は、元来が文字ではない。物語、というより語り物という言葉が、そのありようをふさわしく示している通り、口から耳へと語り伝えられ、記憶されて行った伝説の一つである。文字化されたこの物語のうち、現存する最古のものは、室町時代初期に編まれたと推定されている『神道集』巻末の『諏訪縁起事』だが、『神道集』の成立のかなり以前から、口承によってさまざまに伝えられ、また、『神道集』が成立してからも、柳田国男がいうように、「印刷の機会が無かつた為に、いつまでも勝手に変貌すること、恰も主人公の地底巡歴の如く」(『甲賀三郎の物語』)であったことは、疑う余地がないだろう。

したがって、そのような対象を、もっぱら文字を通じて観察しようとするのは、いうまでもないが、並々ならぬ困難を伴わざるを得ない。『神道集』だけに限っても、写本の系統によってさまざまな異同が諸本のあいだにあるようだし、いわんやそれ以後の草紙や浄瑠璃になれば、甲賀三郎という主人公の名のみ共通で、主人公の行動や行動が招き寄せる運命の具体的な相において

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbo

は、縁もゆかりもなさそうに見えるものが続出してくる。柳田国男をはじめとする先達たちの研究を参照すると、大雑把にいって、甲賀三郎の諱が、『神道集』でのように諏方であるか、その他の物語や浄瑠璃でのように兼家であるかによって、二つの系統に分けられ、諏方の方はその名を音読すれば諏訪に通じる通り、信州出自の色彩が濃厚であるのに対し、兼家の方は、甲賀、さらには伊賀、若狭など、京都周辺の土地と強く結びついている、ということらしい。そのあたりを、古写本の異同などを検討しながら追究するのは、もちろん当方の任にたえる所でもなければ、心がけている仕事でもない。ただ、とりとめなく変転する文字の渦に見入りながら、その向うに何か、動かぬものの姿がおぼろになりとも見えてきはすまいかと、心を騒がせているばかりなのである。

『神道集』の甲賀三郎物語の最も感動的な場面は、地底巡歴を終えた主人公が、信濃の浅間岳へ出、故郷へ帰る所である。地底の維縵国の王に貰った、一千枚の鹿の生肝の作り餅を、一日一枚ずつ食いながら、毒蛇と蜈のたむろする河を渡り、蚊や虻の群れる原を抜け、鬼王や魔女たちの誘惑を振り切って、千日の旅路を経た後、甲賀三郎はようやく日本に近づく。明星のような星が一つ、光明赫奕と空に輝いている「朧月夜」の原で、南の方を眺めると、大きな岩山から大きな真藤が逆まに生え下っている。その藤に取りついて、かけ声を挙げながら岩間を伝い昇るほど

に、千枚の鹿の餅を九百九十九枚まで食べつくし、今一つの残りを半分ばかり食い、五重の岩の階を昇った所でみな食い終えて、浅間の嶺へ出る。

且ク御身ヲ息メテ、東ノ方ヲ見給ヘバ、上野ノ伊香保・赤城・常陸、筑波見ヘケル、南ノ方ヲ見給ヘバ、富士ノ高根・秩父山・甲斐ノ白根、心憂カリシ蓼科ノ巓モ見ヘニケリ、西ノ方ヲ見給ヘバ、更科山・稲武岳・苔ノ御岳モ見ヘニケリ、北ノ方ヲ見給ヘバ、妙光山・御岳・戸隠山・阿妻屋ノ岳、越後国内葉ノ岳モ見給フ、今更旅立ツ心地、生ヲ替タル我身ヤラント思シメサレ、涙ヲ流シ、先ヅ都ノ方ヘヅ上ラルル。

（『神道集』からの引用は主として近藤喜博編東洋文庫本にもとづき、適宜仮名を送ることにする。）

「心憂カリシ蓼科ノ巓」というのは、そもそも甲賀三郎の地底巡歴が、天狗にさらわれた妻、春日姫を捜し求めて、この山の人穴に降り、首尾よく姫を救いだしはしたものの、自分は兄甲賀次郎の奸計によって穴の中に取り残されたことに始まっているからである。その発端を思い返す時、「心憂カリシ」はいかにも哀切なひびきがある。

そしてさらに、都の方へ上り、故郷の近江国甲賀郡に入って、亡父追善のために建立した笹岡の釈迦堂が、朽ちもせずに岩屋堂になっているのを主人公は見る。

近江国甲賀ノ郡ニ入リ見給ヘバ、父ノ為ニ造ラレシ笹岡ノ釈迦堂、朽チズシテ岩屋堂ニゾ成リニケル、而レバ我身ハ此大地ノ底ニ幾百年ヲ経ヌラント思シメス、心細サハ限リ無シ、誤ツテ仙家ニ入リシ人モ、七世之孫子ニ合ヒケルトコソ聞ク、諏方ハ婦妻ニ子ヲモ授カラザレバ、七世ノ孫子ニモ争カ合フベキ、一族親類ニモ合フ事無ケレバ、只有リシ処ニテ、左モ右モ成ルベカリシ物ヲトテ、悲シミ居給フ。

「笹岡ノ釈迦堂」がどこか、柳田国男も分らないと書いている。素人考えでいうと、主人公の苦難のはじまった蓼科岳が、「信濃ノ国笹岡ノ郡ノ内」とあり、信濃と近江と、国は明らかに異りながらも、遍歴の発端と終末が、同じ名の土地において一つの円環を閉じることを暗示しているか、という気もしないではない。しかし『神道集』の系統、諏方の系統ではなくて、浄瑠璃の系統、つまり兼家の系統では、この寺ははっきりしている。すなわち、水口大岡寺の観音堂である。

笹岡か大岡寺か。それぞれの伝承の根拠が何であるにせよ、ある辛い遍歴の到達点が甲賀に印されていることは、どの場合も間違いない。トタンの三角帽子を被せられ、荒廃それ自体の晒しもののように建っている今日の観音堂が、気まぐれな旅行者の心にいわくいいがたい悲愁をそそ

り立てた時、旅行者は、ただ単に時間の残酷を思ったり、懐古的な廃墟の感傷にひたったりしていたのではなく、この土地に漂着した幻の異人の悲しみに、気まぐれは気まぐれなりに、感情移入していたのだ。

「心細サハ限リ無シ」。まことにそう語るのにふさわしい、落魄のたたずまい。しかも甲賀三郎の落魄は、故郷に帰って誰一人知る者もない浦島太郎の不安に似ていて、さらに深刻だといわねばならない。「誤ッテ仙家ニ入リシ人」云々は、中国の浦島伝説を思いだしているのだが、その伝説の主人公がとにかく七代の子孫にめぐり会うことができたのに対して、自分は子供がいないからそれも叶わない。それならいっそ、今までいた地の底で、どうにでもなってしまえばよかった——こうした述懐は、主人公の天涯孤独を強調するために、くどきの形で語り物には頻出するものだが、漢文でもなく和文でもない、独特な文体の無骨さ、ぎごちなさが、かえってその中にたたえられた悲哀を強化し、凝縮するような感じがある。重いばかりで着心地の悪い、つぎはぎだらけの甲冑が、それだけ中に包まれた肉体の素肌の悲しみを、強く印象づけるような所がある。

しかもこの天涯孤独は、子孫を持たぬ嘆きによって、さらに独特な色合を帯びている。ここではただ、生物的な種の保存本能が声をあげているのでもなければ、いわんや、血統の末裔、自分を最後に血は絶えるといった、いわば世紀末風な惑溺を伴った悲愴な思い入れが披瀝されているわけでもない。むしろその嘆きの根にあるのは、祭りを受けぬ気がかりである。死後に、祖霊と

して、しかるべき崇敬を子孫から捧げられるよすがもない魂の不安、供養を受けぬまま冥界をさすらうしかない精霊の怯えが、七代の子孫の有無にこだわる心の底にわだかまっている。

もちろん後の世の人間であるわれわれは、それほど素直に祖霊の存在を信ずることはできないし、したがってその幸不幸に親身になることもできない。先祖代々の墓を立て、彼岸の墓参ぐらいは欠かさないにしても、それはほとんど、世間の習慣に従うことでもって日常生活の安心を得たいか、せいぜい、その形で死者の記憶を新たにしようと努めるか、という程度にすぎまい。自分が死んでから、子孫に鄭重に供養されなくては、浮かばれない、などと真剣に思う人間が、現在いないとはいえぬにしても、ぼくなどを含めて大方は、気弱な懐疑派にとどまっているしかないのではあるまいか、と思われる。

そういう点からすれば、ここで主人公の悲しみに、すんなり共感したり感情移入したりすることが叶うはずはない。荒れた御堂の前でそのことが可能であるように思ったとすれば、それは気まぐれどころか、おこがましい錯覚ということにさえ、なりかねまい。ここに生じた孤絶は、空間的にも時間的にも、われわれの理解を超えたひろがりのうちにある。空間的にはいうまでもなく、浅間の頂から四方の山々を見はるかす、その眺望のイメージの茫漠とした広大さだが、時間的には、死後の生を信じ、そこに希望を抱く者の絶望は、希望を抱かぬ者の曖昧な虚無感より、はるかに大きな幅の時間の中で揺れているだろう、ということがある。

だが、理解を超えているからこそ、それだけ強い驚異の的となり得る場合もある。完全に理解の外にあるなら別である。今述べたようなことを心得ながら、しかもなお、古い物語の漂泊者の悲しみが、気まぐれな今日の旅行者の心にまで沁みこんでくるのはどうしてか。おそらく、そのままでは感情移入など到底おぼつかない、大きなひろがりと幅を持った悲しみが、きわめて稀薄化された状態においてであれ、こちらの理解の範囲内に入ってくるからである。稀薄化されてはじめて、理解、もしくは感応し得る性質のもので、それはあるかもしれない。いずれにせよ、その理解、もしくは感応が、困難であるだけ一層貴重だと感じられる時、物語の世界は、遠く気疎いが故にかえって心をそそり立てる魅力となってくる。

浅間山へ出た時の眺望が提示する、茫漠とした空間のひろがりは、このはるかな旅路の出発点となる山入りの場面において、人を唖然とさせずにはいないほどの途方もなさで、まず突きつけられる。愛する妻を伊吹山の天狗にさらわれた甲賀三郎は、心当る限りの日本の山々を、妻を求めてたずね廻る。

抑モ夫婦偕老ノ恩愛、多生広劫ノ深キ契リヲ因縁トシテ、尋ヌル所ハ何々ゾ、先ヅ畿内五ケ国ヲ尋ヌトテ、山城国比尾田ノ大巓神井山、大和国ニハ三笠ノ大巓春日山、河内国ニハ藤井ノ大巓真角山、和泉国ニハ恋ノ御巓堀江山、摂津国ニハ布引ノ御巓水尾山ヲ始メ、一々次第ニ尋ネ

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbo